

追悼

Pierre Louis Lasjaunias

新潟大学医歯学総合病院放射線科

稲川正一

Shoichi INAGAWA

Pierre Louis Lasjaunias 先生が2008年7月1日、Zurichで逝去された。1948年7月15日生まれの59歳。パリ第11大学クレムリン・ピセートルの神経放射線学主任教授であり、WFITN (World Federation of Interventional and Therapeutic Neuroradiology) の現職会長であった人のその知らせは世界中の多くの人々に衝撃となって伝わった。

Pierre Lasjaunias以前に私たちが頭頸部や中枢神経系の血管解剖をどのように見ていたか、思い出せるだろうか？たとえば、手元にあるPeter Huber著『Krayenbühl / Yaşargil Cerebral Angiography 2nd edition』(1982)の眼動脈の項を開くと、まずその放射線血管解剖学に寄与した医学者を紹介したのち、「6.5%の例ではその起始は内頸動脈が硬膜を貫く1mm以内の部位で、7.5%は内頸動脈海綿静脈洞部から、……」¹⁾ (著者訳)と、起始異常についての統計学的記述が続き、そのあと、各分枝が紹介されている。

時を少しさかのぼって、L. Testut著『Traité d'Anatomie Humaine 7me édition』(1921)を見ると、眼動脈の項ではその正常走行と諸分枝の記述に終始し、項の最後に「涙腺動脈、あるいは眼動脈自体が、中硬膜動脈から起始することがある……」(著者訳)などといくつかの変異型が付記されるにとどまっている⁶⁾。

この60年の間に生体における血管撮影が行われるようになり、多くの情報が得られ、それがたとえば前掲『Krayenbühl / Yaşargil Cerebral Angiography』の統計学的解析をもたらしてはいるが、基本的には、正常解剖と諸分枝、および若干の解剖学的変異の並列記載にとどまっている。

一方、Pierre Lasjaunias, Alejandro Berenstein 著『Surgical Neuroangiography 1st edition』(1987)では、眼動脈は頸動脈の章で語られ、眼動脈という項立てはなく、眼窩という題名の項の中で、眼窩内諸動脈分枝の発

生がもっぱら記述されている。すなわち、個体発生においてstapedial arteryの分枝である眼窩内のほかの諸動脈分枝を原始眼動脈が併合していく様子が段階的に解説され、その途中の段階で併合が停止することによって、眼動脈分岐および諸分枝の解剖学的変異が起こることが図説され、「胎児期の発生に関するこのような検討から眼窩領域で観察される動脈の解剖学的変異を予測することができる」(著者訳)と明確な宣言が記されている³⁾。

正常解剖や解剖学的変異の静的な並列記載から、発生学的見地を基盤とした解剖学的変異の位置づけへと、内容が変化している。

Pierre Lasjauniasのこの書が出版されるまで、私たちは、動脈の解剖学的変異の羅列記載に辟易しつつ、既知のものとはわずかに異なる形態を見つけては、新たな変異型として発表し、発表しつつもその意義を測りかね、心のうちで苦笑してはいなかっただろうか？そのような時代にあって、頭蓋内外の動脈の変異や、内頸動脈椎骨動脈間側副路の変異の位置づけとありうべき限界を実際に発生学的見地から確定してみせた彼のこの書は、血管解剖を見る私たちの眼を開き、シーシュポスの岩にも似た果てしない収集分類作業から私たちを解放した。それはたとえば、19世紀パリの数学者ガロアが、代数的公式で解が得られる方程式の次元に限界があることを証明して群論を創始した事績を思い起こさせる。

発生学的見地から正常血管や解剖学的変異を説明するという発想は、すでに前掲のL. Testut著『Traité d'Anatomie Humaine 7me édition』(1921)で大動脈について認められるから^{7,8)}、これがPierre Lasjauniasの独創でないことは確かだが、頭頸部および中枢神経系の血管解剖にこの方法論を適用してそれを全面的に再構成して見せた仕事は、今後ともこの領域の血管解剖を考察するときの準拠枠となるであろう。もちろんそれが可能となった背景には、1940-50年代のDH Padgetを頂点とする頭頸部血

管の個体発生に関する知見の集積を忘れてはならないが。

そのほかの彼の仕事を手短かに挙げる。Vein of Galen aneurysmal malformationに代表される小児脳動静脈奇形の発生学的意味づけと動脈性塞栓術の確立も、発生学的方法論からもたらされたと言えるだろう。彼はまた、動静脈奇形におけるhigh flow angiopathyやflow-related aneurysmなどの現象を強調し、二次的に動員された栄養動脈と主要因たる栄養動脈を峻別して治療対応し、partial targeted embolizationを提唱した。最近では分子生物学的血管発生学の成果を応用してmetameric vascular (arteriovenous/venolymphatic) syndromeの概念を提唱し、以前から唱えていたproliferative angiopathyの概念を精練していた⁵⁾。

こうやってPierre Louis Lasjauniasの仕事を概観してみると、その根底にひとつの存在論が鳴り響いていることに気付く。つまり、彼以前の、静的な、すでに作られて目の前にあるものとして物事をみる見方に対して、常に生成変化するものとして物事をみる見方である。それが実は、プラトン以来の西洋哲学の存在論に対して、フッサールの現象学やベルグソンの生の哲学、ハイデッガーの「哲学批判としての哲学」²⁾が提示し、20世紀の西洋哲学の基調となった存在論であり、医学の分野でも生理学の父と敬称される19世紀のClaude Bernardの恒常性Homeostasisの概念や20世紀末葉の多田富雄の免疫系における超システムの概念にも通底する見方であることに思い至ると、深く考えさせられるものがある。しかも、このものの見方は、鴨長明の「ゆく川の流れば絶えずして、しかももとの水にあらず」に代表される日本人の自然観になじみ深いものでもある。

温かなまなざしで物事の遙か遠くまで見ていたように思える彼の言葉を引いて、追悼の辞としたい。

「自分の学校が一番だと思うほど危険なことはない。良い学校は肥大化しない。それは外に種をまく。」⁴⁾ (著者訳)。

(写真は今号で留学記と追悼文を書いておられるKittipong Srivatanakul先生がフランス人のスタッフのカメラで今年6月に撮影したものをGeorges Rodesch先生から送ってもらったものである。)

文 献

- 1) Huber P: Ophthalmic artery: Krayenbühl / Yaşargil Cerebral Angiography. 2nd edition. translated by George



Bosse. Georg Thieme Verlag Stuttgart-New York: 68-72, 1982.

- 2) 木田 元：ハイデッガーを読む：木田元の最終講義 反哲学としての哲学。初版，東京，角川学芸出版，2008，56-61.
- 3) Lasjaunias P, Berenstein A: The orbit: Surgical Neuroangiography. 1st edition. Springer-Verlag Berlin-Heidelberg: Book 1, 35-54, 1987.
- 4) Lasjaunias P: Preface: 20 Years of Endovascular Neuro-Intervention in Bicetre, Edizioni del Centauro-Udine, Milano, 5, 1995.
- 5) Lasjaunias PL, Landrieu P, Rodesch G, et al: Cerebral proliferative angiopathy: clinical and angiographic description of an entity different from cerebral AVMs. Stroke 39:878-85, 2008.
- 6) Testut L: Artère ophthalmique: Traité d'Anatomie Humaine. 7me édition. Librairie Octave Doin Paris: Tome 2me, 157-160, 1921.
- 7) Testut L: Artère pulmonaire: Traité d'Anatomie Humaine. 7me édition. Librairie Octave Doin Paris: Tome 2me, 115, 1921.
- 8) Testut L: Artère aorte: Traité d'Anatomie Humaine. 7me édition. Librairie Octave Doin Paris: Tome 2me, 128, 1921.